

ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって

—若者問題に関する韓日間比較調査から（第3報）—

山本 耕平ⁱ

本研究は、当初、2005年に開催されたひきこもりに関する日韓の国際シンポジウムにおいて、韓国のひきこもる若者が「隠遁型ウェットリ」として報告された事実に着眼し、韓日のひきこもる若者の実態とその支援に関する比較研究を行う為に開始した。以後、ひきこもりをはじめとする若者支援の哲学と方法に関する検討を進めてきた。そのなかで、韓国におけるIMFショック後の若者支援、なかでもHAJA centerと一部の自活支援センター等の実践、さらに386世代（486世代）が展開してきた民主化運動やその後の市民運動を生み出してきた協同の関係性や協同組合運動に、多くの学びを得てきた。本論では、韓国と我が国の若者の語りに学びつつ、若者ソーシャルワークの「課題」「実践哲学」「運動」を論じる。そもそもソーシャルワーク過程は、対象となる人が主体となる人となる発達過程をも含むものである。さらに、その発達過程は、主体と共に育つ実践者（ソーシャルワーカー）集団が実践主体としての育ちを獲得するものでなければならない。また、その主体となる人と実践者（ソーシャルワーカー）が、自らが生き暮らす地域を変革し、社会を変革する過程をも含む。本論が対象とする若者に限定するならば、若者が、より多くのソーシャルワーカーや地域住民と共に、自己と仲間、実践者（ソーシャルワーカー）、地域住民との連関のなかで社会変革の主体となる過程が、若者ソーシャルワークの過程である。その対象が主体となる過程を解くキーワードとして、協同の関係性に基づく若者の“生き場所”を提起する。そのキーワードは、今後の若者ソーシャルワーク論の研究と実践を深める契機となろう。さらに、協同関係性の理解を深める為に、韓国の民主化の主体となり、その後の社会運動において協同実践の魅力を伝えてきた386世代（486世代）の哲学に学びつつ、彼らと実践上の葛藤を持ちつつも若い世代が主体として育つ可能性をみる韓国の実践から、我が国の若者ソーシャルワークの実践主体の育ちをどう保障すべきかを考える。

キーワード：若者ソーシャルワーク、韓日比較調査、ひきこもり、協同の関係性、生き場所

目次

はじめに

1. 若者ソーシャルワークの課題

- 1-1 「臨床の言葉」と“生き場所”
- 1-2 協同の関係性に基づく“生き場所”が迫及するもの
- 1-3 協同の関係性と「対象から主体へ」
- 1-4 実践者自身の思春期、青年期葛藤と育ち

2. 若者ソーシャルワークの実践対象と哲学

- 2-1 ソーシャルワーク課題としての若者の生きづらさ
- 2-2 「生の営みの困難」と向き合う若者ソーシャルワーク
- 2-3 「支援」から「協同」への願いと実践哲学
- 2-4 韓国の若者にみる「協同」への願いと実践哲学

3. 若者ソーシャルワークと若者支援運動

- 3-1 若者支援の専門性を育てる運動

i 立命館大学産業社会学部教授

- 3-2 韓国の協同実践を生み出してきた386世代とその役割
- 3-3 根底を流れる哲学「ナムム」マインドと市民力
- 3-4 386世代(486世代)とポスト386世代の実践的葛藤
- 3-5 今実践体を利用し始めている若者たちとの間にある葛藤
- 3-6 若い世代が受け継ぎ発展させる協同実践
おわりに

はじめに

本研究は、当初、2005年に開催されたひきこもりに関する日韓の国際シンポジウム¹⁾において、韓国のひきこもる若者が「隠遁型ウェットリ」²⁾として報告された事実に着眼し、韓日のひきこもる若者の実態とその支援に関する比較研究を行うことを目的に開始した。以後、ひきこもりをはじめとする若者支援の哲学と方法に関する検討を進めるなかで、韓国における IMF ショック後の若者支援、なかでも HAJA center³⁾ と一部の自活支援センター⁴⁾ 等の実践、さらに386世代(486世代)が展開してきた民主化運動やその後の市民運動で生み出してきた協同的關係性や協同組合運動に学びを得てきた。

HAJA center と一部の自活支援センターの若者支援部門に集まる若者たちと出会った当初(2008年、2009年)は、そこで「自身がどう生きるか」「どんな社会を創り上げるか」を真摯に問う若者たち⁵⁾ と多く出会った。また、その若者たちは、その為の実践を主体的に築き上げようとする者たちであった。この事実は、我が国の若者支援を考える重要な資料となる事実であった。

そこで、「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって―若者問題に関する韓日間比較調査から第2報」では、横井敏郎が、ワークフェアとは異なる実践の方向性で見出した若者支援の分析視点を軸にし、韓国で数少ないひきこもる若者を対象とする(彼ら

は、ひきこもりという言葉をつかわずに無重力青少年という言葉で若者たちを表す)社会的企業 Yooja Salon⁶⁾ の哲学と方法を分析した。

本論では、韓国と我が国の若者の語りに学びつつ、若者ソーシャルワークの「課題」「実践哲学」「運動」を論じたい。また、若者ソーシャルワークを考えるキーワードとして、「協同的關係性に基づく若者の“生き場所”」を提起し、今後の若者ソーシャルワーク論の研究と実践を深める提起を行いたい。さらに、協同的關係性の理解とそこに流れる哲学を、韓国の民主化の主体となり、その後の社会運動において協同実践の魅力を伝えてきた386世代(486世代)の実践から学び、今、彼らと実践上の葛藤を持ちつつも若い世代が主体として育つ可能性をみる韓国の実践が、我が国の若者ソーシャルワークに提起する課題を明らかにする。

1. 若者ソーシャルワークの課題

我が国の若者支援の現場には、現在、様々な実践者が「支援」者として参加する。その者達は、キャリアカウンセラーや認定心理士、臨床心理士、社会福祉士、精神保健福祉士等の資格を有し、各々の「専門性」を現場で発揮しようとする。しかし、その「専門性」の発揮は、時には、権力性の発揮となり若者達の主体性を奪いかねない。

その権力性は、若者支援現場に登場する自身の生きづらさを語ろうとしない者に「語る」ことを強要する実践や、語れない者達の「内面を知る」為に幾多の方法の対象とする実践として生じている。また、「働くことや、働く場に迷う」若者と出会った時には、懸命に戦“場”への適応を図ろうとすることもある。その一方で、彼らが自身の“生きづらさ”を語るまで待つことが必要と考え、延々と待つことが専門性であると考える者もいる。さらに、支援者の価値観と異なる「困った事実」を雄弁に語る若者と出会った時、そこで語られたことを、「困った人た

ち」の物語として一括し、「治療的介入」を図ろうとすることもある。

若者ソーシャルワーク過程は、対象である若者が主体となる発達保障を根底におくものである。さらに、その過程では、若者と共に育つ実践者（ソーシャルワーカー）が実践主体としての育ちを獲得する。さらに、その過程では、実践主体としての育ちを保障された若者、家族、実践者（ソーシャルワーカー）は、自らが生き暮らす地域と社会を変革する力を獲得する。

1-1 「臨床の言葉」と“生き場所”

ソーシャルワーカーをはじめとする実践者は、「臨床のことば」⁷⁾の無視あるいは軽視を行ってはいならない。その「臨床のことば」は、若者が、今までの人生で体験してきた事実に基づくものであり、実践者や他の若者と共に生き、自身の人生を見出していく過程で変わりゆくものである。

さて、若者が自身の人生を見出す働きをしてきた“場”として居場所があろう。この居場所は、若者たちのアイデンティティ獲得や社会参加に重要な働きを行ってきており、実践報告や実証的な研究が数多く行われている。石本雄真（2009）は、その居場所研究の経過を分析検討しているが、それは、今日の居場所研究を包括的に分析するものである。石本は、そこで、居場所に関する明確な定義はまだないが、多くは、自己の尊厳が守られる場、自分があるのままで居られる場として登場すると指摘する。

居場所は、若者たちの「臨床の言葉」に真摯に耳を傾けてきた場であろう。しかし、あえて、本論で、この“居場所”という言葉を使用せずに、“生き場所”という言葉を使用するのは、三つの意味がある。一つめは、まさに、若者支援の場は、人としての尊厳の最も基本である生きること（生命の保障）が護られる場であるという意味においてである。若者支援の場では、なんらかの権力性をもつ者が、パターンリズムの思考に基づく実践を展開し、若者たちの生きる権利を奪ってきた事実がある。殺人や傷害、

監禁事件⁸⁾はもちろんのこと、そうした事態に至らなくとも、「支援」者の絶対的な指示に従わなければならない関係性のもとで、自らの課題と対峙することができなかった歴史を踏まえ、若者たちの社会参加に向かう場を、あえて“生き場所”という言葉で捉える。

二つめは、その場は、実践者が、若者と共に如何に生きるかを問われる場であり、実践者の“生き場所”として位置づけることができる。この場で、実践者は、若者、そこで共に働く仲間や地域住民と共に生きる力を獲得し、実践と生活、運動の主体として生き育つ。

三つめに、その場では、若者が、集団に参加し、他者と歴史意識やなにか意識を育て、自己と向きあう力（基礎的な学力、自治力、労働参加力、自己課題発見力など）を育てる。それは、社会的諸矛盾と対峙する場であり、“生き場所”としての意味を持つ。

人としての尊厳の最も基本である生きること（生命の保障）が問われ、実践者と若者が共に如何に生きるかを問われる場である“生き場所”は「臨床の言葉」に耳を傾けることができる質の高い集団が存在しなければならない。

1-2 “生き場所”と協同的關係性

実践集団の質を高める関係性が協同的關係性である。では、まず、協同と共同、協働はどう違うのか定義し論を進めなければならないが、ここでは作業上、次のように定義したい。共同とは、その実践を通して一体化することを目指すものである。実践の根底を流れる思いや目的を共有し、実践的な一体化を求めるのが共同であろう。たとえば、共同保育所運動や共同作業所運動のように、保育所や障害者作業所が不足しているという事実から出発し、ミッションや哲学の議論を通し、それらを創り上げる実践である。

さらに、協働とは、地域実践等で、取り組むべき

課題をいくつかの機関や実践者が共有する時に生じる働きかたである。そこでは、それぞれの思いや能力、機会、場に応じて活動すれば、一人一人の働き方が違っていてもよいとされよう。つまり、解決すべき当面の課題に対し思いを一緒にし、取り組むのが協働である。

それに対して、協同とは、ひとつの取り組みに参加する者が、同じ活動を、それぞれの責任で、専門性や立場性を活かしながら一緒に取り組む動きである。若者支援実践は、当事者、ピアスタッフ、プロスタッフ、地域住民等が、その立場から参画する実践である。しかも、そこでは、その立場の者が実践上の役割を見出し、責任を果たしていくのである。

その取り組みのなかでは、様々な人や集団が、それぞれの責任で取り組む。それぞれの人や集団は、既に獲得した力とまだ獲得していない力をもつ集団員が構成する。その人や集団員は、互いに葛藤や矛盾を持つ。協同的關係性は、この葛藤や矛盾を無視するのではなく、その葛藤や矛盾を、それぞれが新たな力とする関係性でなければならない。

その協同的關係性にに基づき展開される若者支援実践は、いかなるものであるのか。筆者が取り組んだ研究⁹⁾のなかに、研究協力者の佐藤洋作の示唆に富んだ次の発言をみる。

新たなサポートというよりも、一方では、ある程度そういう自分の思春期葛藤、青年期葛藤と相対化しながら、社会的な自我とも折り合いを付けながら次に向かっていく人が、何らかの形で側に居て出会うことの意味っていうのは、非常に社会、ある意味では多様な人、葛藤のただ中に居る人、葛藤を少し相対化した人、色んな人が居て同世代が出会うことの意味は、大きいと思うんですね。本来、支援者だろうがなかろうが、必要なことだというふうには思っています。その出会い方を、どうシステム化していくかっていうことになると、非常に難しいなあと、今も現場では思っています。その辺を今後、今こういう、仕事と言うか、新たな仕事、青年期支援と言

う新たな仕事、教育とも違う、福祉とも違う、キャリア相談とも違う、もっと新たな、生き直し支援みたいな領域が新たに生まれて来ていて、それがどんな支援なのかっていうのが、実態として、僕も余り良く分かっていない¹⁰⁾。

佐藤は、若者支援を「生き直し支援」と考える。この「生き直し」こそ“生き場所”で追求すべき実践ではなかろうか。

若者自身が若者の孤立や排除を生じさせている今日の新自由主義的諸矛盾と、対峙する主体となる力を獲得する実践は、当然、職場への適応を支援する実践で事足りるものではない。若者が、自己を肯定し、自己の尊厳を追及する実践が展開される時、若者は「処遇」の対象ではなく、実践の主体となる。実践者は、若者たちが、そうした人生を生み出す場を彼らと共に作りあげる必要がある。

1-3 協同的關係性と「対象から主体へ」

では、なぜ、若者が、実践の対象ではなく、主体となることを求めるのであろうか。その理由を考える時、竹内常一らの次の整理（2012）が重要な問いかけとなる。竹内らは、自書の書名との関わりで「教育と福祉の出会うところ」はどこなのかという問題提起を行い、以下のように述べる。

「教育と福祉の出会うところ」とはどういう「ところ」なのか問わなければならない。それは、「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、……最大の尊重を必要とする」（憲法13条）とされているところである。いいかえれば「教育と福祉の出会うところ」とは、一人ひとりの個人の生命、自由及び幸福追求に対する権利が尊重されることであるといっていだらう。（中略）「教育と福祉の出会うところ」とは、一人ひとりの個人が他者とつながり協同して、

生命に対する権利をまもり、社会的な拘束を超えて自由の領域をひらき、幸福を追求することを可能にする社会を政治的につくることだといわねばならない。（竹内、2012、pp.4-5）

竹内らは、生き直し支援は、システム変革と自己変革の同時進行を見通すものであり、それは、「一人ひとりの個人が他者とつながり協同して、生命に対する権利をまもり、社会的な拘束を超えて自由の領域をひらき、幸福を追求することを可能にする社会」においてこそ可能となると指摘する。

さらに、宮崎隆志（2007）は、現代社会のシステムに起因する「生きづらさ」をなくすのは、単に意識の上だけではなく、「システム変革と自己変革の同時進行を見通した時のみ、『生きづらさ』を生み出す現代社会システムへの対案を提示し得る」と述べる。

この対案の提示こそ、協同的關係性に基づく若者ソーシャルワークが求めるものである。それは、彼らの「生き直し」として展開され、彼らの解き放ちが可能となるシステムを実践的に提示する。

1-4 実践者自身の思春期、青年期葛藤と育ち

今、現場に出る若い世代のソーシャルワーカーは、同じ年齢の他者との間で生じるピア・コンプレックスに苦しみながら、学校生活（大学・養成校も）を送っている。

彼ら移行期の若者にとって、自己効力感を強化し自己同一性高めるためには、一定の安心や安定を与えられつつも適切な矛盾のなかで自己の課題と対峙できる場が必要である。しかし、彼らは、安心や安定が与えられるばかりか、新自由主義的価値観が貫徹する学校で、仲間と競争してきた。さらに、その競争は、実践者となった後も自身にピア・コンプレックスをもたらす要因となっている。そのピア・コンプレックスから解き放たれずにソーシャルワークの現場に出た若者たちは、自己が他者からどう評価されているかを気にしながら日々の実践に取り組ん

でいるのである¹¹⁾。

対人支援現場に出て行こうとする大学院生 A は、支援者になろうとする自己の不安を次のように語る。

僕自身はそのひきこもりという明確な経験があるわけではないんですけども、精神的な部分ですごく、似通った部分があったりするのです。人と関わることが、あまり得意じゃあないなあっていう、自覚があるのです。色んな場面に出て行くと、だいたいこう、「ひきこもり親和群」みたいに紹介されることが多いんです。（中略）人と関わって行こうとする時に、自分自身に何の価値も見出せてない状態やと、やっぱり積極的に関わって行こうってことも出来へんし、その中で自分自身を語るということも、すごく難しいこととして、感じられるのです。例えば、人の輪の中に居ても、自分を出して行くということも出来へんし、もう場合によっては、そこにいてるってこと自体が、他者に対して不快感を与えてしまうんじゃないかっていうように思うのです¹²⁾。

A は、若者支援現場に参加する学びを積んできた。しかし、自己の課題と向き合うなかで、その参画に大きな不安をもっていた。彼は、佐藤が「生き直し支援みたいな領域」と表現する捉え方を行う実践現場と出会うことができるか否かを危惧するなかで、その不安をより強めていたのである。今日の福祉政策や若者政策が、ソーシャルワーカーが共に育ちあう時間的余裕を備えているとは言えない。多くの現場は、若いソーシャルワーカー達の揺らぎを保障する余裕がない。むしろ、次から次に生じてくる事例に対応できるソーシャルワーカーを即席で育てようとする。そのなかで、現場に魅力を感じれずに去っていく多くの若者がいる。

若者ソーシャルワークの現場は、今、現場に参加してきた若手のソーシャルワーカー自身の生き直し支援の役割をも果たす必要があるのではなかろうか。

宮崎隆志の次の指摘は、ソーシャルワーカーをはじめとした、いわゆる専門家たちが、自らの生きづらさに気づき、語り、実践の場で十分に揺らぐなかでこそ、新たな援助関係が生じることを意味する。

システム社会を構成している個人もそこから逸脱したとされる個人も、共に生きづらさを抱えて生きていることへの理解であろう。この点ではむしろ専門的な援助者のほうが大きな壁に直面する。なぜなら、専門家は当該社会システムにおいて正統と認められた理論と知識を備えることによって、特別の位置を付与されているからである。近現代社会の構成論理は、実証主義的な科学である。それを我がものとすることによって専門家たり得る対人援助者が、自らの生きづらさを語ることは近代的専門家たることを自ら否定することになる。その大きな壁を乗り越えたときに、ようやく被援助者との新たな関係を産み出すことができるようになる。(宮崎, 2007, pp.42)

実践現場で、「なんのためにやっているのか」「自分は、なんのために仕事をしているのか」という自己への問いかけを行うことが多い。その問いの答えと出会う為に不可欠なのは、質の高い集団ではなからうか。

質の高い集団には、いくつかの要素が必要であろう。そこで求められるのは、見せかけの共感や傾聴の力をもった集団員の存在ではない。疾風怒涛の時代にある若者が、実践主体として育つ集団には、彼らが揺らぎつつ育つことが可能となるしかけが必要である。そのしかけは、集団員のなかに適切な矛盾を生み出す教育的なしかけである。今、実践現場は、そのしかけを創り出す条件をもっているだろうか。職員の非常勤化が進み、すべての職員が顔を合わせ、実践現場で生じている事実を議論する時間さえ奪われるなかで、現場で生じている事実を通して、自己の実践と自己の人生を考えることが困難となっているのである。

質の高い集団は、その集団が自らの生きづらさを

語るができる場となる必要がある。今、育ちつつある若い世代の実践者のみならず、老練な実践者までが、さまざまな生きづらさをもつのが現在の社会である。若い世代のソーシャルワーカーが、なんらかの生きづらさを現場で表す時、それを自己の責任や家族の責任とし、彼らを「役に立たない実践者」として排除する集団は、より多くの若者の人生を共に考え、若者が社会の主体となる実践を展開できなからう。

2. 若者ソーシャルワークの実践対象と哲学

“生きる場”では、若者を総体としたソーシャルワークが展開されなければならない。

2-1 ソーシャルワーク課題としての若者の生きづらさ

若者ソーシャルワークは、その対象をどう把握すべきであろうか。窪田暁子(2013)は、「社会問題としての生活問題」や「生活困難」といった曖昧さを含んだ言葉を援助対象の問題として吟味する必要があると述べる。そのなかで、「生活」という語は、英語のライフ(life)に相当する意味で用いられることが多く、それを生命活動、日々の暮らし、生涯の三つの次元に分けることができるが、ライフを「生活」と訳することにより、多少の混乱も生じると述べ、英語のライフが含んでいる生命活動、日々の暮らし、生涯の三つを十分にまとめた言葉として、「ライフ」を表す日本語を「生」と定義する。(窪田, 2013, pp.4-6)

若者支援を考える時、“若者の生きづらさ”という状態からその対象に迫ろうとすることがある。しかし、この“生きづらさ”という言葉から、ソーシャルワーク課題を整理することは困難ではなからうか。藤野友紀(2007)は、「生きづらさ」「生きにくさ」は「多様な領域で語られる言葉」であり、「具体的になにを指しているのか、あるいは抽象的にどのような定義があてはまるのか」という共通の見解めい

たものはまだない」言葉であると述べる。田中康雄は、この生きづらさを「生命そのものを維持してこの世にあることや、生活を営むこと自体が困難であること、さらに生き生きと存在し、役立つ働きを示すことが困難であるということの意味する」（田中、2007, pp.4）と定義する。また、川北稔（2009）は、ICFに着眼し障害構造論との関わりで「生きづらさ」を捉える。

筆者は、ひきこもる若者たちは、「現象的には、青年期の発達課題と主体的に対峙する能動性・主体性が阻害される生活のしづらさ（生活障害）をもつ」と考える。さらに、その生活障害は、「人生を規定する経済や文化・価値等の社会的背景、家族機能（とりわけサブ・システムと集団の機能）、思春期以降の発達や生活を規定する社会システムとの関わりで生じる」ものであると考える（山本、2009, pp.15）。この「生活障害」とは、統合失調症を中心とする精神障害者がもつ生活を行う困難を示す概念であるが、ひきこもりを含む「生きづらさ」をもつ若者たちは、統合失調症ではなくとも、その年齢で社会参加の為に必要とされる生活をおこなう上での困難を有するのではなからうか。

その「生活をおこなう上での困難」は、当然、ソーシャルワーク課題として捉えることができよう。さらに、それは、「生活問題」とイコールではない。

窪田（2013）が、「生活問題」に相当する内容に焦点を合わせるために「生の営みの困難」という言葉を提案しているが、その提案こそが、今日の若者の「生きにくさ」「生きづらさ」とソーシャルワーク課題である「生活をおこなう上での困難」を考える上で重要な視点となるのではなからうか。

窪田（2013）の「生の営み」という言葉の提案には、二つの意味が含まれる。一つは、「これまで生活問題と称してきた概念の内容に、単に日常生活あるいは家計ということに限定せずに、その人の人生のすべてを含ませていたこと」であり、もう一つは、「生命活動と生涯の二つの次元の問題への援助活動をそれぞれ中心的に扱う医学や宗教などとも異なり、

福祉援助は明らかに日々の暮らしのなかに反映されている具体的な課題を主として取扱い、日々の暮らしを成立させ、発展させ、発展させてゆくことを目標としている仕事であること」である。（窪田、2013, pp.7）

窪田の指摘を、若者ソーシャルワーク固有の領域で理解するならば、若者が、乳幼児期からの生活上の諸課題から影響を受けてきた二つの側面の構造を明らかにする作業と、大人に移行しようとする彼らとその諸課題と向き合う力を獲得する為に必要な“生きる場＝生き場所”における諸活動を検討する作業が必要となる。

つまり、若者ソーシャルワーク固有の課題は、健全な移行期保障にあるのではない。その人生を通して彼らの人生を困難にしてきた課題と向き合う主体が育ちあう“場”（それを“生き場所”して捉えたい）での実践方法と、その場や社会を創造する方法と制度・政策・法さらに運動を総体として検討することが、その固有の課題である。

2-2 「生の営みの困難」と向き合う若者ソーシャルワーク

若者ソーシャルワークの実践対象を狭義に捉える論調は、批判的に検討する必要があるだろう。例えば、水野篤夫ら（2007）の次の指摘である。

ソーシャルワークの目的は、人々の生活上の問題解決・緩和により、質の高い生活（QOL）を支援し、個人のウェルビーイングの状態を高めることと一般に言われる。その意味で、本来的に、「問題」（＝マイナス状態）に注目し、その解消・緩和（＝マイナスの減少）が目標となり、マイナスが「0」となることが働きかける目的となる。それに対して、ユースワークは、若者が子どもから大人へ移行していくプロセスに関わり、そのための必要な経験の場（学ぶ場）を作り、若者が本来持っている力を損なう状況があれば支援的に関わることを目的としている。

(水野, 2007, pp.89)

この指摘であれば、マイナス状態の解消・緩和がソーシャルワークであり、水野らが専門とするユースワークはそのゴールを「若者が大人となる」ことに求めるが、ソーシャルワークは、そのゴールを当事者の「問題の解決」「軽減」とするという論考となる。社会教育を基礎科学とし、世界的に多くの成果をもたらしているユースワークの理論と実践を否定するものではない。ここで明確にしたいのは、若者ソーシャルワーク独自の実践対象であり、実践・理論双方の差異である。

若者ソーシャルワークが独自の実践分野として成立する為には、その実践対象ならびに目的を、若者と若者の実質的平等の回復に求めるべきであろう。鈴木勉(2011)は、実質的平等の回復について触れるなかで、福祉の実現を次のように述べる。

福祉の実現とは、人に財を提供することで完結するのではなく、また、その置かれた社会的境遇に拘束されがちで、主観的な満足度を評価基準とするべきでもなく、手に入れた財の特性をその人が活用し、伸びる素質を全面的に発達させることにあるというのである。(鈴木, 2011, pp.24)

若者ソーシャルワークは、若者の生活課題が解決あるいは緩和され、たとえマイナスが緩和あるいは解決されても終結するものではない。鈴木(2011)の言葉を借りるならば、若者がQOL自立の主体となる時、いかなる取組が必要であろうか。

佐藤洋作は、あるシンポジウムで、若者支援を「若者たちが、人間関係や働く能力を学び直し、身につけていく条件を保障していく制度的、福祉的な取り組み」と定義し、その「学び直し」は、「上からの支援」ではなく、支援スタッフと被支援者という関係をを超えて、共に現代の課題を克服するために肩を並べ学び合っていく関係を築くことで可能になると述べる¹³⁾。

佐藤が、ここで言う「福祉的な」とは、福祉実践のことを意味するものとして捉えたい。佐藤は、「共に現代の課題を克服するために肩を並べ学び合っていく」なかでこそ「人間関係や働く能力を学び直し、身につける」が可能になると述べる。「上からの支援」ではなく、支援スタッフと被支援者という関係をを超え実践される学びなおしは、まさに、協同的他者関係に基づく主体形成として取り組まれるものである。

若者ソーシャルワーク固有の課題である若者の人生を困難にしてきた諸課題と向き合う主体が育ちあう“場”(これを、“生きる場”としてきた)で若者が「生の営みの困難」と向き合う時、実践者や実践体に求められる基本的な実践哲学(実践の立ち位置)は、若者の姿に学び深める必要がある。

2-3 「支援」から「協同」への願いと実践哲学

Bは、関東地方のある都市で展開する総合的な若者実践体のなかで、六次産業化を目指した農業にひきこもる若者やニートの若者と共に取り組んでいる。B自身も、ひきこもり経験のある若者である。

最初は、もうほんとうに行きたくなくて。そういう若者支援をやっているとかも、全然知らなくて。自分としては、そんなに、あんまり「ひきこもり」とか、「ニート」だという自覚は、なくもなかったんですけど、認められなくて。「自分は、もっと普通に働けるんだ」という思いもあって、そういう若者支援の機関に行くっていうのは、何かちょっと自分としては恥ずかしいというか、悔しいというか。何か、「作業所」みたいなイメージもあって、最初は行きたくなくて。うちは父親が、もう僕が1歳半ぐらいのときからなくて。ひきこもりのときは、母親とずっと二人の生活だったんですけど。関係もすごい悪くて、家の中にも一言もしゃべらなくて。そういう状態で、親に紹介されたところに行くっていうのは、何か「親の力に頼って、行くような場所」という感じがして、高校のときから、すごいそーい

う抵抗がありました¹⁴⁾。

Bが「生の営みの困難」と対峙する力を育てることができなかったのは、彼自身が生き生きできる実践体との出会いがなかった為であろう。その彼が、K（実践体名）と出会い、次のような思いを持つ。

K（実践体名）で自分が「やりたいな」と思ったのは、スタッフがみんな自分で自分たちの働き方をつくっていく。そういう、自分たちの生き方を、自分たちでつくっているっていうのに、すごい「いいな」と思ってやり始めて。自分がひきこもりになって、ほんとは出て行く場所がなくなっちゃって。今までは「小中高って行って、大学行って、就職して、結婚して」っていう、何となくの将来のイメージとかがあったんですけど、もうそっから外れちゃったら「どうやって生きていいか、分からない」ということで、ずっと立ち止まって。その立ち止まっていたときに、「K（実践体名）」の「ああ、こういう生き方もあるんだ」というのが見えて、「自分も、こういうふうに生きていけたらいいな」と思って¹⁵⁾。

Bは、スタッフがみんな自分たちの働き方をつくっていく、そんな「支援」という感覚をあまり持てない現場に魅力を感じ、「やりたい」と思ったのであろう。彼は、自分たちの生き方を、自分たちでつくっていく場と出会い、彼自身の「生の営みの困難」と対峙する力を生み出したのである。

2-4 韓国の若者にみる「協同」への願い

Bと同じように、なんらかの排除状態にあったが、自己の人生に取り組む人と出会い、「生の営みの困難」と向き合う韓国の若者にCがいる。ソウル市で実践するユジャサロンで働くCは、自己の“いま”を、「一緒に人生に取り組む人」が存在し、「睨んだり」「排除したり」しない「歓迎」の目線と、単なる共感性ではない協同性が存在する“場”にいと表

現する。

もちろん、葛藤とか不安の要素はあるが、でも今私は、逆にこの競争社会に生き残るために準備する段階だと思っている。今、普通に学校に通っている子より、今、自分の未来を真剣に考えているし、準備しているので、不安とか葛藤よりは、もっと高く飛ぶための準備するための段階であるのではないかと考えている。（2011年8月23日フィールドノーツ、C、ソウル、ユジャサロン）

彼が所属するユジャサロンの実践哲学に関しては、第2報で報告した為、ここでは再度述べない。韓国社会では、ひきこもりは、まだ十分な論議されるまでに至っていない。しかし、生きづらさに気づいていない多くの若者がいる事実は否定できない。そのひとつが自殺率の高さ¹⁶⁾や家出問題¹⁷⁾として生じていると推察できる。

Cはさらに語る。

今までは自分を歓迎してくれたりとか、そういうことじゃなくて、睨んだりとか、排除したりとか、そういう目線をずっと感じていたが、このユジャサロンに通うことによって、自分を歓迎してくれる人がいるんだ、ということを知れた。それで、一緒にする人がいるということが分かったということが一番の変化だ。

BやCが求めてきた、「睨んだり」「排除したり」しない「歓迎」の目線と、単なる共感性ではない協同性を育てる“場”、つまり協同的他者関係が存在する場では、この場で生活する者が、そこで生じている課題を社会的な課題として捉え、その解決や緩和に協同して取り組む。ユジャサロンに参加する若者は、参加する前の生活を次のように語る。

D：17歳（日本の年齢では16歳）

以前部屋に閉じこもっていた。家族の紹介で精神科のお医者さんを紹介してもらい、そこで1年間相談をして、でもあそこではそんなに役に立たないと思っていて、その先生が1388¹⁸⁾を紹介してくれた。そこを6カ月利用した。でも、逆に悪影響をうけて、Yoojaを紹介してくれた。

山本：1388から紹介された施設での悪影響？

D：ヘルパーさんがあんまり理解してくれなくて、自分の暗闇みたいところだけ、ずっとさしたので、それで私が怒りもち、それでは行けないと思い、それで判断し、その人も自分は役に立たないといひ、変わりにこちらを紹介してくれた。(2011年8月23日フィールドノーツ, C, ソウル, ユジャサロン)

若者自身が、「自分たちの生き方を、自分たちでつくっている」という実感をもつことができる場には、協同的他者関係が存在し、課題にそれぞれの責任と役割に関わる協同的な実践が存在する。その場は、若者たちの生存・発達を保障するミッションと哲学を持つ。そのミッションと哲学は、当事者と実践者の間で築いた協同的他者関係が力となり追及され深められる。

韓国の若者たちは、今、新自由主義的な競争のもとで生き、「生の営みの困難」と向き合うが故に、協同的他者関係を求め、協同実践を模索しようとしているのではなかろうか。

3. 若者ソーシャルワークと若者支援運動

若者がソーシャルワーカーとしての専門性を得る人生を選んだ初期において必要なことは、勝ち負けの価値観のなかで生きてきた自分くずしと、ソーシャルワーカーとしての自己と世界づくりに取り組むことではなかろうか。

若者が主体となる“生き直し支援”が協同実践として展開されると考えるならば、協同実践を追及し

てきた若者たちの取り組みから学びをえる必要があるろう。

このひとつに、韓国の386世代の存在がある。386世代は、祖国の民主化の為に立ち上がり、暮らしやすい社会を創り上げる為に寄与してきた。

彼らは、祖国の民主化以後、社会的企業を生み出し、協同組合運動をリードし、その一部は、今、ポスト386世代との間に実践上の葛藤を持ちつつも、実践主体を育てている。

3-1 韓国の協同実践を生み出してきた386世代とその役割

386世代が生まれた1960年は、韓国にとって劇的な年であった。1960年3月に行われた第四代大統領選挙により不正選挙を抗議した学生や市民の大規模なデモが結集され、第四代大統領李承晩を下野させた。しかし、1年後の軍事クーデターは、その力を封じてしまった。1979年、釜山や馬山で大規模な民主化デモが起こっていた時、第5代大統領となった朴正熙の暗殺があった。

386世代が大学生活を送った朴正熙暗殺後の1980年代初期は、軍内部では維新体制の転換を目指す上層部と、朴正熙に引き立てられた中堅幹部勢力との対立が表面化していたが、「ソウルの春」と呼ばれる民主化ムードが続いていた。

これにたいして、光州市では戒厳令撤廃と金大中氏釈放を求める大規模なデモが起き、1980年5月18日、戒厳令で休講になっていた全南大学に多くの学生が集まってデモの準備を行った。金大中が逮捕されたこともあり、光州市民は戒厳令の解除を求めデモを実施した。この抗争は27日に終結を見るまで10日間繰り広げられた。戒厳軍はデモを鎮圧するために空輸部隊を投入したが、光州市民は警察から武器を奪い武力で対抗しようとした。そして光州は「血の海」に化した。(韓, 2004, pp.344-348)。

1980年初めに反政府運動に加担し大学から除籍された学生たちは、国民和合措置により復学が容認され、学内における政治活動を容認する学園自立化措

置や政治活動規制解禁措置なども取り組まれた。87年の盧泰愚による「民主化宣言」や憲法改正（大統領直接選挙など）とともに生じた軍事政権の崩壊は、こうした大規模な弾圧による国際的批判のなかで生じたのではなからうか。

民主化を勝ち取り、統一への希望もようやく持てるようになった。言い換えれば、現在の自由・繁栄・南北和解への潮流は、「386世代」に象徴される民主勢力の犠牲と努力の上に成り立っている。彼ら（民主化のなかで時には命を落とし、時には投獄された386世代達：注山本）はけっして無駄死したわけでもなく、捨て石でもない。

学生たちの多くは教室に戻ったが、労働運動などの社会運動に入ったり、国会議員の秘書になったりする者も出てきた。386世代が、今日まで揺らぎなく韓国の民主化やより暮らしやすい社会を創造してきたのではない。彼らのなかには、猛烈な競争を勝ち抜き大学に進学し、韓国政府の政策的な担い手になってきた者やサムソンやヒュンダイ等の企業の中核に座っている者もいる。

386世代にとっては、民主化という勝利を自らの行動で勝ち取ったという体験によって得た進歩的な考え方は経済学、政治学、歴史学での論争で敗れたぐらいでは揺らぐことはなかった。しかし、彼らも新自由主義社会の競争の中に投げ出され、格差が激しくなる韓国で生き抜く為に懸命にならざるをえなかったのではなからうか。

朴元淳（2003）が我が国の市民運動調査を行い、その報告を行っている文献のなかで、次のことを指摘している。

これまでの市民運動にも論理と哲学がなかったとはいえない。しかし、韓国社会を総体的に変化させるにあたり、われわれの接近方法はあまりにも政治的かつ社会的すぎたのではないか。はたして市民運動にたずさわっている人々は、こういう社会をつくるのだという明確なビジョンをもっているのだろうか。

われわれの暮らしや生き方はどう変わるべきなのか。もう少し哲学的に悩むべきではないか。（朴，2003，pp.60）

朴は、386世代であり、人権弁護士として参与連帯¹⁹⁾ 創立時に事務局長を担い、2000年には落選運動²⁰⁾ の中心的な役割を果たした現ソウル特別市長である。彼は、この言葉に続き、「かつてマルクスの著作や古典を読みながら覚えてしまった感動を忘れてしまったのではないか」と、韓国の同世代の市民運動家たちに次のように語りかける。

参与連帯の会員同士がたがいに人生を語って共有する必要がある。こうした小さな集まりが数かぎりなくつくられるべきだ。会員はたがいにすべてを分かち合える精神的な友となる。宗教団体や企業ではすでに行われていることだ。しかし、彼らには真摯な献身と愛情が欠けている。市民団体にも黙想は必要だ。いっしょに黙想のための呼吸をしたり、料理をつくってパンを分かち合う場を設けることが必要だ。数日間をともにし、たがいに関することを語り合っ
て深く付き合ううちに、参与連帯のめざす世直しについても共有できるようになるだろう。（朴，2003，pp.80-81）

新自由主義社会の競争の中に投げ出され、格差が激しくなる韓国で、生き抜くことは、386世代にとってもそんなに簡単なことではなかった。その世代の一部が、朴がここで指摘する「たがいにすべてを分かち合える精神的な友」となる運動であり、「真摯な献身と愛情」のもとで、「互いに関することを語り合い」世直しを行う運動に取り組んできた。386世代が、果たしてきた役割は、まさに、この市民運動を根強く展開するなかで市民力を育てることであったのだろうか。

3-2 根底を流れる哲学「ナナム」マインドと市民力

386世代が取り組む他の実践から、韓国若者支援の根底を流れる哲学を学ぶことができる。蘆原区の孔陵(コンヌン)青少年文化情報センター²¹⁾の実践にそれをみよう。この青少年センターに入る坂の中腹にあるコンクリート塀に青少年が描いた絵画があった。センター長は、この絵をさし示しながら、町を青少年と住民で描いた絵でいっぱいにする活動の一環であることを紹介した。

このセンターは、大韓聖公会が運営するものである。大韓聖公会は、韓国における教育や福祉(なかでも代案教育やホームレス支援等)を熱心に行う組織である。大韓聖公会のミッションは、キリスト教精神による「開かれた心」「分かち合い」「奉仕」を基礎とし主体的な人間の育成、分かち合いを実践する共同体的な人間の育成を目指す。この為、大韓聖公会が関わる組織では、人文学の学習や普及を徹底する。

何よりも興味深い3つのキーワードがあった。それは「青少年町活動家」「夢分かち合い」「排除と主体」である。「青少年町活動家」、町を汚し町の住民から嫌われる青少年が、町の住民から尊敬される存在になる。

このセンターで目指している青少年町活動家育ては、彼ら自身が自己尊厳を高めることができる重要な手段となっている。「夢分かち合い」、それは、そもそも新自由主義社会の競争主義の下で、夢が個人化し困難な課題である。ここで取り組まれている自身の夢、町の夢を分かち合う実践は、夢の個人化との戦いであろう。

「排除と主体」は、今、自分達が住む町を自分たちの力で創り上げ、かつて持っていた居住地の条件から生じた排除感を克服し、ソウルあるいは韓国社会に主体的に参加する町・人として育っていくことを目指す実践であった。

青少年文化情報センターで取り組まれていた『「開かれた心」』『分かち合い』『奉仕』を基礎とし主

体的な人間の育成、分かち合いを実践する共同体的な人間の育成」は、若者が、自身の課題を克服するソーシャルワークの対象から主体への取り組みを可能とするものではなからうか。その主体の育ちを保障する実践の根底を流れる哲学は、「分かち合い(ナナム)」を基盤とするものである。

桔川純子(2009)は、「分かちあい」というマインドを育てる為に、韓国では計画的な「ナナム教育」が行われていると、次のように述べる。

幼いころから「分かちあい」というマインドを教育するための「ナナム教育」は、学校の教師や地域児童センター(学校が終わった後、地域で保護が必要な18歳未満の児童・青少年に勉強が文化プログラムを提供する施設)の教師たちが教材をつくったり、子どもや親たちへワークショップを行ったりと様々な努力を重ねている。「ナナム教育」での出会いは、研修を受ける機会の少ない地域児童センターの教師や地域の保護者たちを対象に、学校の教師たちがセミナーを開くなど、地域で知識の「分かちあい」という新たな「ナナム」の循環を生み出している。(桔川, 2009, pp35-36)

「分かちあい」(ナナム)の哲学は、自分の給与や小遣い、年金から、また各自が持っている才能から1%を寄付して助け合う「ナナムキャンペーン」はもちろんのこと、個人や企業の名前でのファンド、「共感」といわれる「分かち合い」の哲学に基づく弁護士や団体の団体が社会的弱者の人権擁護の為に活動する動きを生み出している。この哲学が根底を流れる若者が主体となり、新自由主義的な競争と排除で生きづらいソウルの街を創りかえようとする動きがある。

それは、THE CHANGEという集まり(取り組み)である。この集まりは、世の中を変える新しい方法を探すことを目的とし、「THE CHANGE」という名前をつけている。そこは、特定の分野を対象とした市民運動の場ではなく、非営利団体の活動家の教育

や、カンファレンスを開催し、市民運動家が育つプラットフォームの役割も果たしている。

2011年には、「どうやって生きていくか」をテーマに活動を行ったという。そこでは、市民力をどのように向上させるか、変化はどのように起こるのか、共に暮らすにはなにが必要か、なぜ私たちは生きていくのかが話し合われた。この活動には、ソウル市長や芸能人などの有名人も参加し、市民と話し合う機会を持った。約200名の市民がテーブルを囲んでワークショップが開催された。ソウル市長や芸能人などの有名人は、「才能寄付」というかたちで、この集まりに参加した。ここに流れるのが「分かち合い」（ナヌム）哲学である。

「THE CHANGE」は、Think Caféも経営するが、ここは、Caféによる利潤の追求を目指したものではない。彼らは、その場を「自らが変化の主体として一緒に成長する」場として活用している。ここに、386世代が追求してきた主体の創造をみる。

3-3 386世代（486世代）とポスト386世代の実践的葛藤

韓国における若者分野の実践哲学を整理するにあたって、386世代（486世代）が歩み築いてきた実践哲学を無視することはできない。しかし、今、大学を卒業し福祉現場に出ようとする若い世代の実践者たちが、その386世代（486世代）がもつ価値観との間で実践的な葛藤をもっている事実もある。その事実を含めて、386世代（486世代）が築いてきた実践哲学は、我が国の若者支援実践現場における実践主体の育ちと実践哲学の育ちを考える重要な視点となるのではなかろうか。

なぜならば、我が国の障害者共同作業所運動を1970年代初期から担ってきた、いわゆる共同作業所第一世代と、今、専門学校や大学を卒業し現場に参加する若い世代のソーシャルワーカーの間にも、障害者運動への価値観や実践観との関わりで深刻な葛藤が生じている。もちろん、これは、障害者福祉現場のみではなく、若者支援現場においてもみられる。

そこで、韓国ソウル市の貧困地域のある自活センターの職員を対象とし、386世代（486世代）と若い職員の中に存在する実践上の葛藤を問うインタビューを実施した。

386世代である（1968年生）センター長のEは、大学で電子工学を学び、卒業後、一般企業で働き、15年前に社会福祉の世界に転じた。

彼は、現在の青少年分野における実務者（実践者）やリーダーグループは、386世代とその後の世代であっても、それほど葛藤がないのではないかと前置きをした上で次のように述べた。

今の学生たちは、運動をあまり重視していないように思われる。そのことが色々な職場で影響しているように思われる。たとえば私たちは自活企業を作るときに自活企業の主体になる人たち（参加者たち）が労働者協同組合をつくるときの一人ひとりが哲学を持つ、哲学的な観点を持つことを大切にしている。でも、若いスタッフは技術的な側面にすごく関心を持っている。例えばどうすれば社会的企業になれるかとか、どうすれば補助金をもっともらえるかとか、そういうことに関心を持っている。単なるサービスとして考えている。その時に葛藤が発生するが先輩たちはそういった観点や、哲学が必要だと指摘するが、若い人たちはなぜ自分たちが怒られているのかわからない。これが私は断絶だと思っている。（2012年1月4日フィールドノーツ、ソウル、冠岳自活支援センター）

1968年生まれれのFは、韓国の民主化を語る時、最も重要な時期に大学生生活を送った。プサンで出会ったFと同年代の女性運動家は、「私は、日本語の会話はできないが、日本語を読むことができる。それは、日本語で書かれたマルクス主義の本で仲間と学びあったからだ」と、1980年代半ばの大学時代を語った。Fも、この人と同様の大学生生活を送っている。Fと同世代の大学生達は、反政府運動に加担し大学から除籍されながらも、国民和合措置により復学が

認められ、学園自立化や政治活動規制解禁に取り組み、87年の「民主化宣言」や憲法改正（大統領直接選挙など）を導き出した。その386世代（486世代）が、韓国の若者支援や社会的企業を作り出す運動のリーダーとして現存するのである。Fが、青少年グループの実務者として捉えている1981年生まれのGは、このFの発言を受け次のように述べる。

私は元々現場から出発して、大学生のときには労働運動やボランティアなどにも参加した。大学での専門は歴史学科だった。だから386世代と通じる部分もある。社会運動もやっていた。でも葛藤はある。386世代は、対象者に対して「意識化する」ということを重視していた。でも私は、青少年は、まだ自立の過程にあるので、青少年に対しては意識化することはまだ早いのではないかと考えている。大人の場合は自分の主張や意志がきちんとあるので、抵抗したり、「それは違うよ」と反対の意見を出すことができるが、青少年はまだそれが樹立されていないので、支援者が言ったことをそのまま受け取ってしまうかもしれない。だから中立的な観点から青少年の場合は自分の観点が作れるようなサポートが必要だと考えている。(2012年1月4日フィールドノート、ソウル、冠岳自活支援センター)

この二人の語りのみで、386世代とポスト386世代の実践上の葛藤を一般化し論じることは危険であろう。ただ、Fが「一人ひとりが哲学を持つ、哲学的な観点を持つことを大切にしている。でも、若いスタッフは技術的な側面にすごく関心を持っている」と述べる点は、韓国の若者支援における主体形成を考える上で、非常に大事な語りであろう。また、それは、我が国の若者ソーシャルワークを考える重要な視点になるのではなからうか。

韓国の社会福祉士は、1. 2. 3級に区別され、精神保健福祉士は1. 2級に区別される。社会福祉士1級は、国家資格であり、精神保健福祉士は1. 2級ともに社会福祉士1級である。韓国の社会福祉

士教育に関する調査に関しては、十分なものをみない。ただ、1級社会福祉士にも、各専門分野（例えば児童や青年期）等の専門的な知識や技能を「専門社会福祉士」として求めようとする²²⁾ 我が国と同様の動きがある。この動きは、ややもすると専門的な技能と知識を持った「専門家」を育て、「技術」に依拠し、若者たちを矛盾の多い社会への適応を図ろうとする動きを強めるのではなからうか。さらに、そこでは、支援者相互の集団や当事者を交えた集団、コミュニティの集団に参加し、主体的に社会変革を目指すことが軽視されるのではなからうか。

3-4 今実践体を利用し始めている若者たちとの間にある葛藤

386世代とポスト386世代の間の葛藤のみでなく、今、実践体を当事者として利用し始めている若者たちと、彼らと最も距離の近いポスト386世代の間に生じる葛藤について捉えなければならない。青少年自活センター若者支援を担当する実践者に、そのセンターで、韓国の若者支援体やホームレス支援体でみかけることが多かった人文学への取り組みについて質問したところ、次のような回答があった。

こちらでも人文学をやったが、やめた。理由は、自然に若者と話したりしたが、一年で講師がやめた。フリーに話をするなかで、社会問題の話になったら、若者達が社会を知る中で、社会に出ることが怖くなったのでやめた。先に必要なのはこころの傷つきに対するケアではないかと思う。生きる意欲を育てることが重要。そして人文学を理解するのに、言葉が違い、難しい。例えば、今日一日、悪口をしなくて生活しようと思ったら一日沈黙だった。先生のいったとおりに理解してほしいが、言葉が難しく、自分なりに理解してしまうからばらばらに理解してしまう。(2012年3月2日 フィールドノート)

2011年に青少年自活支援センターを利用した45名の内、30名が不登校であり、ほとんどが15~20歳の

若者であった。45名のうち10名が就職した。学校に行かない子はお金が必要なのでバイトをしていたが、基礎生活保障法により生活は保障するから「一緒に勉強しよう」と、若者たちに学習を保障してきた。彼らにとって、社会的な自立（自活）が最優先課題であり、どう生きるかを学ぶ人文学の学習は切実な要求でなかったのかもしれない。

また、Yooja Salonを活用する若者（G）は、自己が今をどう生きるかを次のように語る。

いつかからは学校に通っている子どもたちがうらやましいと感じることになった。それは、学校に通うだけで何かやっているように見えている。だけど学校に行かない子達は、自分で探して何かやらないといけないし、ずっと何か実践しないといけないし、何か行動しないといけない。ということが、ちょっと追いつけるかということがあって。だから、私は臆病で、実践能力もあまりないので、その意味で学校に通っている子がうらやましかった。で、個人的には来年は軍隊に行かなければならない。今、法律が変わっている状態で、何かという軍隊の法律。私は、中学中退なので、小学校卒業だから、もともと軍隊に行かなくてもよい。韓国は高校卒業でないと逆に軍隊にいけない。だから、軍隊にいかななくてもいいと思っていたのに、イ・ミョンバク政権になってもっと厳しくなって、小学校卒業でも軍隊に行けということになっているので、今、これが国会を通過する予定。だから、今年の対象者だが、今、考慮中、免除が。（2011年8月22日 フィールドノート）

彼は、二つの不安に襲われながら生活してきたのである。それは、韓国の激しい競争主義から排除された自分が、なにか行動しこの国で生きていかなければならないという強い不安と、小学校卒業だった自分も服役しなければならなくなり、服役後に待っている生活への不安である。

彼ら、若者支援の現場に登場する者達の親は、年代的には386世代であることが多い。もちろん、その中には、大学で自覚的に祖国の民主化運動に参加していた者もいるが、貧困な生活のなかで苦しんでいた者もいる。若者たちは、その親たちに、反発を感じながら生きている。なかでも、親が386世代であり、大学で祖国の民主化の為に奮闘していた場合、自身が共に働く386世代やポスト386世代の権力性を感じ取っていることが多いのではなかろうか。

尹鈺喜（2009）は、「若者自身における自立概念や現代社会における自立への問題点」を引き出す為に、若者の語り注目し、若者の自立をめぐる親子関係葛藤につき考察を加えている。自立に関するジェンダー間の相違につき検討を行い、次のように考察する。

韓国社会では、今日でもなお、家の継承における男性への期待が高く、子どもの頃から男女に求められる自立の内容は異なっている。つまり、親は息子に対して経済的な期待が大きく、自ら意思決定を行う能力を求める。その為、男性は就職における経済力の獲得や結婚への経済的負担を感じると考えられる。それに対して、娘の場合、生活の身の回りのことがきちんとできることを要求され、結婚するまでは経済力や意思決定に対して親の保護下で生活することを求められる。（尹，2008，pp.497）

若者支援の実践体を利用する者は、社会参加上のなんからの課題をもつ者達である。Fが語るように、「臆病で実践能力もあまりなく」「軍隊にもいけない」男子は、家の継承を期待することができない子どもでもあるかもしれない。386世代の親たちには、自分たちが民主化を成功させたと自負や自覚がある。若者たちが参加する実践体のリーダーが、親と同じ386世代や、その386世代に葛藤を感じつつも歩み続けているポスト386世代である時、若者たちは、その実践家たちから、あまりにも大きな期待を向けら

れているとの思いを持ち、実践現場で不自由さを感じるのではなからうか。

3-5 若い世代が受け継ぎ発展させる協同実践

韓国の若者支援実践者は、既に386世代から、次の世代に移行しつつある。朴が「われわれの暮らしや生き方はどう変わるべきなのか。もう少し哲学的に悩むべきではないか」とする“われわれ”とは、まさに386世代である。国と対峙し、民主化と向き合うことが必要だった彼ら自身の暮らしや生き方がどう変わるべきなのかを問われる時、新自由主義競争のなかに置かれてきたポスト386世代や、その後の世代が、この国で主体として生きることは簡単なことではなからう。

自身が386世代でもあるムン・ボギョン韓国協同社会経済連帯会²³⁾ 執行委員長兼、社会的経済研究センターの副所長) や、彼女と世代の異なる30代の若者支援者(キム ミキョン: 青少年仕事ハブ²⁴⁾ 共同代表) と40代の韓国の社会運動研究者(カン ネヨン: 大学講師) に、「協同組合基本法をつくる運動ではいわゆる386 (486世代) が中心となっていると思うが、それに続く世代が一緒になって協同組合を発展させていくような運動が韓国で可能なのか」という質問を行った。

ムン・ボギョンは、この質問に対して、「486世代が反省しなければならぬのは、次世代を育成しなかったということ。これからは大学生たちがこの領域に関心をもつようにしかけることが大事だと思う。その媒体として考えているのが大学生協であり、今後関係をつくっていく必要があると思う」と語り(2012年1月6日、ソウル、カン・ネヨン氏自宅、フィールドノート)、キム ミキョンは、「お互いの立場があるから」としながら、386世代(486世代)と、それ以降の世代の生き方の条件が違うことを強調する。

386世代(486世代)が進めてきた地域運動は、まさに社会運動であり、民主化運動として展開されてきたものであった。市民運動の文化と多様化のなか

で、386世代に引き続く世代の者が、自国の課題に関心を向けなかったのかといえばそうではない。例えば、川瀬俊治ら(2009)は、2008年の蠟燭デモには、多くのポスト386世代の参加があったことを報告する。この蠟燭デモはBSE問題に端を発し行われた大規模なデモである。そこに参加したポスト386世代は組織化された社会運動への参加者ではなかっただろう。ただ、そこで提起されたイシューは、BSE問題のみではなく、教育政策、医療保険などの公共部門の民営化など、李明博政権の政策全般に対する批判行動へと拡大した。

カン ネヨンが、その場で、「40代がいろんなモデルを提示することは難しい。でも、考え方とかいままでどうやってこのような構造になっているか、ということについては20代30代はあまり詳しくない。自分はそういう風生きてきたから。でもどうやってこのような構造になっているのかについてマッピングを示すことは40代ができること。そのなかで20代30代との関係性をどうやってつくっていくかが逆に意味がある」(2012年1月6日、ソウル、カン・ネヨン氏自宅、フィールドノート)と述べるように、今、韓国の若者支援者達は、386世代(486世代)が築いてきた民主化の歴史を踏まえつつも、自身の暮らしと向き合う為に、いかなるイシューがあるのかを問い行動しているのではなからうか。

そのなかで生じている動きのひとつに「青少年仕事ハブ」がある。これは、2013年2月末に、ソウル市のウンピョン区で出発した中間支援組織である。青年仕事ハブは、若者を支援する組織が集まったものである。青年仕事ハブは、地域を基盤に、創造キャンプのような教育活動を行う団体を支援して若者の活動を応援する。

韓国の若者支援の現場は、常に動いている。それは、社会的企業法や協同組合法を活用しながら実践を展開しているのであるが、その現場では、どう生きるかを議論し、社会的な諸課題と対峙している。

3-6 若者支援の専門性を育てる運動の課題

若者がソーシャルワーカーとしての専門性を得る人生を選んだ初期において必要なことは、勝ち負けの価値観のなかで生きてきた自分くずしと、ソーシャルワーカーとしての世界づくりに取り組むことではなかろうか。その為には、どう生きるかを議論し、社会的な諸課題と対峙しなければならない。

宮盛邦友(2012)は、「労働運動を軸としつつ、また、新しい社会運動を視野に入れて、人間発達援助実践を組織化した人間発達相互援助運動をつくって、誰にでもできるように人間発達援助実践を網の目のようにはりめぐらせる」ことにより、新しい社会的共同が生み出されると述べる。

若者支援の最終地点は、社会への適応を図ることではない。隅広静子(2010)が、個人の問題を社会的・経済的・政治的な構造や制度と関連させて分析する視座で捉え、社会の変革を目指して理論と実践を内省しつつ循環的に発展させることの重要性を指摘するように、若者支援者は、個々人の内的な問題を医学的・心理的に解決することに終始してはならない。個々人の内的な問題は、人間が社会的な存在である限り、今日の社会の構造的な諸矛盾がその要因となっているのであり、その要因は、当事者である若者と家族、実践者の運動により社会変革により軽減する可能性が生じるのである。

今、まさに、ソーシャルワーカーは、地域のあらゆる人や組織とともに、文字通りの地域ぐるみの若者支援を展開しなければならない。その為にも、ソーシャルワーカーがいかなる立ち位置で実践を展開し、若者が、支援の対象から支援の主体、実践の主体へと育つ実践とするかが問われているのである。

おわりに

本研究で取り上げられなかった課題に、“いま”を生きる若者を対象とする韓日の社会福祉士教育の課題がある。筆者は、精神保健福祉士教育の対象として登場する若者たちと、教育が目指そうとするも

ののなかに生じる矛盾を次のように指摘した。

国家資格化を進める者達の論の中に、資格化前精神科ソーシャルワーカーが、とりわけ医療分野においては不安定な身分で勤務していることが多く国家資格の下で身分が安定するといった夢物語を語るのもであった。本来、ソーシャルワーカーがその資格において社会的地位を護られ、それ相応の給与が保障されるのは当然のことである。ここで陥ってはならないのは、資格化や研修により高度専門職化を目指すことでソーシャルワーカーの社会的地位が護られるかのような錯覚である。(山本, 2012, pp8-9)

彼らの存在を必要とする当事者（病者や障害者、貧困者、子ども、高齢者等々）の権利を保障し、当事者の立場に立ち政策側と向き合う専門職であるソーシャルワーカーの社会的地位を確固としたものとする為には、それを目指すことを国民的課題として認識できる運動が不可欠である。

韓国若者支援の場合は、今、民主化以降の社会の動きの中で、なかでも新自由主義社会の矛盾が成果を脅かすなかで、支援者と若者が築いてきた実践哲学を大切にしつつ、新たな方策を生み出そうとしている。ただ、そこにも、我が国と同様に適応への波が若者を襲っている。

今、韓日の若者支援者に求められていることは、実践者（ソーシャルワーカー）自身が、新自由主義的価値観から解き放たれることである。新自由主義的価値観にがんじがらめになったソーシャルワーカーは、実践現場で、若者たちに新自由主義的価値観に基づいた適応や、観念としての“生き直し”を強要し「楽になる」ことの必要性を説く以上の実践を展開することができないのではなかろうか。若者とソーシャルワーカーが共に“生き直し”を追求する時、ソーシャルワーカーは、彼らと共に常に社会的な諸矛盾と対峙し、彼らと共に社会変革の主体となる必要がある。

注

- 1) 2005年11月, 「2005 International Symposium」(은둔형 외톨이 등사회부적응 청소년 지원방안) がソウルにて開催された。これは、韓国社会に十分な参加ができずに放浪する若者が増加し、適切な社会的支援が緊急に必要であるとの危機感を持つ韓国青少年院が主催したものである。
- 2) 韓国における隠遁型ウェットリのクライテリアは、①最小限の社会的な接触なしに3ヶ月以上部屋に泊まっている、②就学・就業などの社会参与活动をすることができない、またはしない: お金が必要な場合1-2日アルバイトをしたりもする活動型隠遁型一人ぼっちを含む③友達は1名以下④部屋で生産的な活動をすることができない、またはしない⑤自分の隠遁状態に対して不安感や焦燥感がある⑥精神病的障害、または中等度以上の精神肢体障害がある場合を除くとなっている。日本のクライテリアには、「様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしていてもよい)を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべきである。」(厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(H19-こころ一般-010)」(研究代表者 齊藤万比古)がある。
- 3) HAJA スクールは、1999年12月18日にソウル市立ソウル市青少年職業体験センターとして設立された。運営は、延世大学に委託されている。組織構造は運営部、企画部からなり、スタッフ(30名)である。社会的企業であるノリダンや Organization 料理、トラベラーズマップ、リブランクがある。2010年10月にソウル市立青少年創意(クリエイティブ)センターとなった。
- 4) 自活事業とは、韓国の公的扶助制度である「国民基礎生活保障制度」において取り組まれてきたワークフェア政策である。1990年代末からのIMFショックによって失業者や貧困層が急増し、稼働能力層を保護の対象外とする既存の「生活保障法」では、実業・貧困問題に対応しきれなくなった。すべての国民を対象とする国民基礎生活保障法が1999年に代替立法された。金大中政権の生産的福祉パラダイムの展開の結果、自活事業が導入されることとなった。自活事業の制度化には、1970年代から行われてきた「生産共同体運動」や、制度化過程における市民運動の成果などの運動成果の蓄積が大きな影響を与えた。
- 5) HAJA は哲学を大きく2つに分けることができる。それは、“Youth Culture Workshop of Work, Play, Self-determination” と “Creative and Autonomous zone with friendship and hospitality” である。この2つの哲学は、まさに HAJA が目指すべきものを表現している。HAJA を、仕事と遊び、自己決定の新たな文化を創り上げる場として捉え、HAJA は競争主義からの相互の傷つきを克服する友情と hospitality を創り上げ自律的(自治的)に運営する場として規定しているのである。“Youth Culture Workshop of Work, Play, Self-determination” は、“Teenagers make new schools for new era” “Lose-lose game in competitive cram schools” “Self-leading and cooperative learning” の3つの哲学によって構成される。韓国における競争主義が次代の若者達を育てることに大きな障壁となり、さらに教育を通して競争主義を支える「競争率の高い」学校や塾により被害者となっている若者こそ、新たな時代を創り上げる新たな学び方を獲得し “Self-leading and cooperative learning”, つまり、協同学習による自己との向き合いこそ、競争主義と対峙する若者の育ちを保障するものと考えのではなかろうか。ここで述べる「協同学習」とは、まさに競争主義教育とは実践的対義と考えてよいのではなかろうか。
- 6) 韓国の民間支援団体でニート・ひきこもりを支援対象としている組織。2010年に社会的企業の認定を受け、韓国のソウル特別市にある HAJA センターのなかに事務所を構えている。2013年4月現

在も、ユジャサロンに続くひきこもりを対象とした社会的企業は無く、韓国で唯一のひきこもりを支援する社会的企業となっている。

- 7) 臨床家である我々は、当事者の生活に参与し実践に基づく理論を構築しなければならない。その為に、臨床の言葉を汲み取ることが必要である。それは、多様な人との出会いにより豊かになる。やまだようこ(やまだ他, 2000)は、ライフストーリーは、「個人の人生」を語る行為でありながら、「個人」を超えた文化・社会・歴史の物語であり、時間のなかでの変化プロセス、時間をへて自分の中で出来事を再構成し、意味づけていく心理的プロセスこそ人生の物語 (life story) の核心となると言う。
- 8) 1982年12月に起きた戸塚ヨットスクール事件では、当時訓練性だった13歳の少年が、戸塚ヨットスクール校長であった戸塚宏に角材で殴打され、外傷性ショックで亡くなった事件。2006年に5月に起きた、名古屋市のアイ・メンタルスクール事件では同年4月14日に入寮した男性が、18日に外傷性ショックのために死亡。解剖の結果、複数の内出血や擦過傷が認められ、17日寄るから18日朝までの間に暴行を受けた可能性が認められた。
- 9) 山本耕平, 2013, 「ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究」第42回三菱財団社会福祉事業・研究助成研究成果報告書
- 10) 前掲「ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究」, pp29
- 11) 例えば、筆者らが、障害児者福祉現場を対象として行った調査では、メンタルヘルス不調者がとくに多かったのは、「事業規模40人以上で働く人」「5-10人の職員を管轄する人」「会議が週3回以上の人」「週60時間以上働いている人」「睡眠時間5時間以内の人」であった。また、「20歳代後半の中間管理職」「30歳代後半の男性管理職、40歳代の女性管理職」にメンタルヘルスの矛盾が集中していた。若者の多くは施設の理念・考え方に共感して入職し、共感した理念等を学習してきたもの、今まで生きて形成してきた価値観とのギャップにも迷いつつ臨んでいる事実があった。そのなかでは、特に、若者は、上司の評価が常に気がか

りとなっている事実が明らかになった。(NPO 法人大阪障害者センター：福祉現場のメンタルヘルス検討会, 2011, 障害者施設職員のメンタルヘルス調査報告書—約1200人の職務・精神健康度調査から)

- 12) 前掲, 「ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究」, pp8
- 13) 佐藤洋作, 2013, 「B: シンポジウム I 「生きづらさ」を超える学び: 教育と福祉が出会うとき」『シンポジウム報告書: 子ども発達臨床研究センター総合研究企画』35-41
- 14) 前掲, 「ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究」, pp.6-7
- 15) 前掲, 「ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究」, pp.7-9
- 16) 韓国の若者自殺率は OECD 加盟国のなかでも高い。2011年3月、自殺対策の根拠法となる「自殺予防及び生命尊重文化醸成のための法律」が制定された。
- 17) 2005 International Symposium において、ファン・スギル氏らは、韓国の若者達には、家出、自殺、学業中断、インターネット中毒、薬物乱用、性問題、学校暴力などが増加し、彼らの健康と地位が多様に脅かされていると報告している。(황순길, 권혜수, 장미경, 한국의, 2005)
- 18) 韓国青少年委員会が全国130所に青少年相談センターと青少年支援センターを設置した際に、24時間相談活動を行う際に統一した緊急電話番号が1388である。この際に実施青少年危機介入プログラムを1388と呼ぶ。
- 19) 参与連帯とは、金泳三政権時代の1994年9月に発足した韓国における市民運動団体であり、「市民参加」「市民連帯」「市民監視」「市民代案」を掲げ政治参加を行う。
- 20) 2000年の総選挙で「落薦・落選運動」と呼ばれる運動として出発した。ように2つのステップで行われた。イエローカードキャンペーンと呼ばれる政党に公認しないように求めたものと、レッドカードキャンペーンとも呼ばれた選挙において投票しないように呼びかけた運動として行われた。
- 21) この青少年センターは、大韓聖公会在が運営するものである。大韓聖公会在は、韓国における教育や

- 福祉（なかでも代案教育やホームレス支援等）を熱心に行う組織である。大韓聖公会のミッションは、キリスト教精神による「開かれた心」「分かち合い」「奉仕」を基礎とし主体的な人間の育成、分かち合いを実践する共同体的な人間の育成を目指す。
- 22) 社会福祉士の資格には1級、2級、3級があるが、2003年から1級社会福祉士は国家資格をうけてその資格を獲得しなければならない。
- 23) 韓国協同社会経済連帯会とは、従来、韓国では社会的経済部門のネットワークと協同組合のネットワークが別々に存在していたが、協同組合基本法の制定もあり、制定を機会にそれらが統合してつくられたもの。
- 24) ソウル市の努力のもとで、仕事、生活、活動のプラットフォームとして、誰かの話に耳を傾け、お互いのエネルギーを分かち合うことのできる空間、自分と社会をつなげる活動を展開している。自分、社会、ソウル、そしてグローバルな世界を行き交い、未来の社会をデザインしていこうとする青年たちをつなげる役割をしており、若者の悩みを共有し、助け合いを通じて問題解決をこころみる。

引用参考文献

- 藤野友紀, 2007, 「「支援」研究のはじまりにあたって—生きづらさと障害の起源」『子ども発達臨床研究』(1), 45-51
- 石本雄真, 2009, 「居場所概念の普及およびその研究と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』3(1) 93-100
- 尹鈺喜, 2008, 「韓国における若者の「自立意識」と親子関係—韓国の親子関係と若者の自立への葛藤に注目して—」『人間文化創成科学論叢』11, 489-498
- 韓培浩, 2004, 『韓国政治のダイナミズム』法政大学出版局
- 川北稔, 2009, 「若者の「生きづらさ」と障害構造論—ひきこもり経験者への支援から考える」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』(12), 293-300
- 川瀬俊治, 文京洙編『ろうそくデモを超えて—韓国社会はどこに行くのか』東方出版
- 窪田暁子, 2013, 『福祉援助の臨床—共に共感する他者として』, 誠信書房
- 宮盛邦友, 2012, 「子どもの生存・成長・学習を支える新しい社会的共同—新しい教育学のスタイルを探求するために」『北海道大学教育学研究院紀要』(115) 153-163
- 宮崎隆志, 2007, 「システム社会における生きづらさの構造」『子ども発達臨床研究』(1) 39-44
- 水野篤夫, 遠藤保子, 2007, 「ユースサービスの方法とユースワーカー養成のプログラム開発～ユースワーカー養成に関する研究会の議論から～」『立命館人間科学研究』14, 85-98
- 朴元淳, 2003, 『韓国市民運動家のまなざし—日本社会の希望を求めて—』風土社
- 志賀文哉, 2009, 「社会正義とその教育—フィールドと論理教育を結ぶ—考察」『社会医学研究』27(1): 57-66
- 隅広静子, 2010, 「クリティカル・ソーシャルワークにおける「クリティカル」概念の整理の試み—ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・シンキングの概念確立のために—」『福井県立大学論集』34(43)-55
- 鈴木勉, 1999, 『ノーマライゼーションの理論と政策』萌文社
- 竹内常一, 佐藤洋作編, 2012, 『教育と福祉の出会いとこころ—子ども・若者としあわせをひらく』, 山吹書店
- 田中康雄, 2007, 「子ども発達臨床研究センター発足記念学内シンポジウム—子どもたちの「生きづらさ」を考える—児童精神医学の視点から」『子ども発達臨床研究』(1), 3-10
- 山本耕平, 2009, 「若者のひきこもりを精神保健福祉課題としてどう同定するか（高垣忠一郎教授・津田正夫教授退任記念号）」『立命館産業社会論集』45(1) 15-3
- 山本耕平, 2012, 「精神科ソーシャルワーカーと精神保健福祉士養成：新カリキュラムの狙いと先輩ソーシャルワーカーのねがい（特集—社会福祉専門職養成をめぐる諸問題）」『総合社会福祉研究』(41) 6-18
- 山本耕平, 2013, 「ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究」第42回三菱財団社会福祉事業・研究助成研究成果報告書

Issues of “Support Philosophy” and Methods to Assist Socially-withdrawn Adolescents (HIKIKOMORI) :

Based on comparative research of youth problems between South Korea and Japan
(The third report)

YAMAMOTO Koheiⁱ

Abstract : In 2005, the Japan-ROK international symposium on HIKIKOMORI was held in Ritsumeikan University. At that time, some presenters introduced the so-called “Korean type” of this social withdrawal phenomenon. In response to this, I have studied the issues of “support philosophy” and methods to assist socially-withdrawn adolescents based on comparative research. This study shows youth social work’s “mission,” “practical philosophy” and “social movement,” based on both nations’ youth narratives. In addition, the 386 (or 486) generations, which supported the democratization of South Korea and led some civil movements, are targeted in this qualitative analysis. Naturally, social work involves stages of development to improve individuals and community. People need to realize that they are their own agent in life. Moreover, these agents and social workers gradually change their community and society through interaction, along with community residents. In order to face the difficulties in creatively shaping one’s being, a place is needed especially for youth to exist as “unique” individuals based on cooperative relationships.

Keywords : youth social work, South Korea-Japan comparison research, HIKIKOMORI, cooperative relationship, topos of existence

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University